

会 議 録

1 会議名

第3回上越市立図書館協議会

2 報告（公開）

- (1) 平成26年度図書館利用実績（4月～2月）について
- (2) 平成26年度図書館事業実績（4月～2月）について
- (3) 平成27年度図書館関係予算の概要について
- (4) 事務事業総点検の評価結果について

3 その他

4 開催日時

平成27年3月26日（木） 午後3時から5時まで

5 開催場所

高陽荘（西城町3丁目）

6 傍聴人の数

なし

7 出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

- ・委員：有澤委員長、丸山副委員長、河村委員、大越委員、上原委員、池田委員、
武江委員、井上委員
- ・事務局：高田図書館 佐野館長、植木副館長、栗本係長、丸山主任
直江津図書館 笠原館長、平田副館長

8 発言の内容（要旨）

<上越市立図書館条例施行規則により有澤委員長が議長となる>

● 平成26年度図書館利用実績（4月～2月）について

事務局：別紙資料1により概要説明

丸山副委員長：全体的に図書館利用者の減少が目立つのだが？

佐野館長：前回会議の際、それまでの利用実績の中で極めて落ち込みが大きかったの
で、図書館としても問題意識を持っている。木曜日の入館者が少ないというのは、
木曜日は高田・直江津とも月1回の図書整理日で休館しているので、その分貸出

人数は勿論、冊数も落ちてくる。12月が減っているというのは今回だけのことなのか…。12月初旬から中旬にかけての大雪で高田図書館の駐車場も狭くなった実情もある。何れにしろ、どの年代においても利用者が若干落ちているという現実には、少し興味が薄れてきているというトレンドであると自覚を持ったので、こうしたことに対する手の打ち方を今後詰めていきたいと考える。例えば来づらい時期にどうサービスするか、実は花見期間中は駐車場が使えないため、貸出期間を延長の上、一人20冊の取り扱いをしている。こうしたことから逆に来年度の統計の中で来館者が減るとか影響が出るかも知れないが、一つ一つ対策を講じながら年度毎にいろいろなものの見方・評価をして工夫努力をしていきたい。

丸山副委員長：先日の新聞に20、30代の若者層の図書館利用が減っているのはスマホのせいとあったが、上越地区でも若い人の利用率は減っているのか。

佐野館長：子育て世代の30代が減っている。私はスマホの影響とは考えず、スマホ等の情報ツールと活字とを併せて活用する仕組みを考えたい。本日議決されたばかりだが、市では27年度に観光の情報提供等ができるよう高田公園内にWi-Fi利用の仕掛けづくりを行う。基地局が高田図書館に設置され、館内閲覧室でも利用可能になるので、情報検索の入口としてスマホを、詳細は図書館の活字の資料を活用してもらえばいいか。

丸山副委員長：子育て世代の取り込み等は考えているか。

佐野館長：例えば高田図書館にはAVコーナー（貸出不可、聞くだけ）があるが、それを廃止し空いたスペースを子育て関係に活用するとか、子ども達の勉強スペースと閲覧室を離し落ち着いて調べものができるよう工夫するなど、今後研究していきたい。

河村委員：高校生の利用は？

栗本係長：16～18歳の利用者で今年度は1,330人、前年度の1,680人から350人少なくなっている。

河村委員：高田高校文芸部の機関紙に載っていたアンケート結果によると、今の高校生は本を借りるより買う方が多かった。理由は「本が増えるのがうれしい」「多くの人が見たのはいや」というもの。

武江委員：今の子どもは潔癖で、産まれた時から親が消毒している。それとタブレッ

トで読んでしまうから本が必要ない。

佐野館長：電子書籍については県立図書館で既に問題意識を持っており、どこまで取り込んでいくか議論が始まったところ。国会図書館もいろんな取り組みをしているが、いずれ電子書籍は作家の理解を得てコンテンツが増えてくれば、物理的な本の劣化は解消されるが、ダウンロードする・しない、とか著作権の問題もある。

有澤委員長：（本を）電子書籍で見られる、（本が）汚いのはいやだから買う、となると図書館はどうなるのか。今が考える時期、図書館の曲がり角に来ている。だが、私の経験ではやはり活字で読まないで頭に入らない。

武江委員：今はスマホで全て調べられる。

佐野館長：新聞の特集記事で見たのだが、作家たちがなかなか食っていけなくなっている理由の一つに、図書館の複本の数があるのではないかということだ。林真理子氏は公共図書館はできるだけ複本を増やさないでほしいという立場であるが、もちろん反対意見を含め色々な意見がある。図書館は貸本屋とは違うのだから、人気の小説ばかりを揃えるのではなく、複本もある程度セーブしている。貸出を待てる人は待ってもらい、そうでない人は書店で買っていただくというスタンスでないと、何でもかんでも要求に応えられるということではない。

丸山副委員長：蔵書についてだが、地方出版、例えば上越の作者のものとか地元出版社のものなど、そうしたものに目を向けた蔵書の仕方も考えてみては？

佐野館長：郷土資料作品は地元図書館として揃えるべきものと位置付けており、少なからず、もれなく収集している。それらは中央の（流通）ルートに乗らず、市内の書店にお願いをしている。

丸山副委員長：自費出版等寄贈するといった場合は受け付けるのか。

栗本係長：寄贈は年間 800 冊からあるのではないか。

佐野館長：地元ものに限らず、いろいろな形で出版されるものが寄贈として送られてくる。地元で出版したもので、例えば地元町内の何十周年記念誌といったものをいただくこともある。それらは概ね揃っているのではないか。

丸山副委員長：高田・直江津の地域に根差した図書館とするため、パピルス等に「寄贈ください」と載せるなど積極的に宣伝してはどうか。

佐野館長：「図書館へ寄附してください」というアピールは両刃の剣で、現在、新出版

のものは全て受けているが、リサイクルブックと勘違いされると收拾がつかなくなってしまう面もある。

上原委員：複本と郷土作家についてお聞きしたい。例えば私の同級生の三浦 展(ミウラ アツ)さんは「下流社会」等いろいろな本を出しているのだが、郷土コーナーでは1冊ずつしかなく貸し出しできなくなっている。作家によっては館内閲覧しかできない場合も多い気がする。

佐野館長：三浦 展(ミウラ アツ)さんの「下流社会」は一般書（コーナー）のところにもあり、一般と郷土とに分けてある。

丸山主任：基本的に郷土資料は2冊で、1冊は保存の意味で禁貸出、1冊は貸出可能で対応してきたが全てではないのも事実。現在は高田図書館と直江津図書館併せて1冊は貸し出しできるような体制となっている本もある。どの範囲までを郷土と捉えるか、狭く考えると上越市立図書館の直接貸出しのエリアまで、広く考えると新潟県全体ということになる。2冊の場合、高田地区を本拠地とする（作家の）場合は、来られた方が必ず見られるようにということで、高田図書館が禁貸、直江津図書館が貸出、となっている場合も多い。

有澤委員長：ケースケースで違うということ？

丸山副委員長：すると今の場合、複数冊の寄贈や購入をしていけば振り分けできるということか。

丸山主任：寄贈の際、なるべく保存用と貸出用ということでお願いをするのだが、その時々で1冊ということもある。

大越委員：貸出者数・貸出点数の減からいろいろな話が出てきたが、H25年との比較で（資料内の）赤字が非常に多い。ずっとこの傾向が続いている。これからどうするか議論をされているのか。特に子どもの読書活動・自主事業参加者数がドンと減っている。“図書館の魅力”について今一度基本に立ち返るべきでは。

有澤委員長：かつては右肩上がりの時もあったが…。合併後に何が必要なのか話をしていけないと、存立そのものが疑われる時が来るかも。

佐野館長：どこの図書館も基本的には受け身の体制である。どこかの大学の図書館が「1度も借りられていない可哀相な本たち」というポップを作り前面に出したら、それが急激に借りられた。いろいろな工夫をしながら人の注意を呼び起こすよう

な仕掛けが必要。単純に広報紙掲載だけでなく見せ方だとか意識の持たせ方とか併せて工夫していかないと、常に受け身の姿勢になってしまい悪循環に入るパターンになってしまう。限られた予算の中で各ジャンルの色々な資料を収集する訳だが、正直買ってから1か月の間で1回も借りられない本は現実にある。これも一つの目の付けどころで、いろいろな人に関心を持ってもらうには切り口を変えることも大事かと思う。単純に人が来ないからとか、世の中の価値観がどうのこうのとかに甘んじているのではなく、打って出る仕掛けを考えていきたいと思っている。

大越委員：30代の人たちが減っているとのことだが、30代（の親）が多い小学校の父兄に何校かお願いしてアンケートを実施したらどうか。なぜ図書館に行かないのか？行きたい図書館の理想像は？といった質問を図書館に来ない人に聞いてみたらいいのでは。

佐野館長：実は市内の保育園・幼稚園の園児の母親にアンケートを取っている。

栗本係長：図書館に遠い・近い、公立・私立、大きい・小さい等考慮して実施したが、30代は子育てで忙しくてとても行けない、本を読んでいる時間がないということだった。

大越委員：どういう状態なら行くかという設問をすればいいのでは。

佐野館長：去年か一昨年か、議会で「赤ちゃんタイム」を設定できないかという質問があった。小さいお子さんが騒いで迷惑を掛けるので図書館に行きづらいということから、何時から何時までは小さいお子さん連れの方々が自由に本を探せる時間とし、他の皆さんからも文句が出ないようにするもので、いくつかの自治体では実施済みである。ただ、これを設けることで逆に差別になるのではという懸念から、当時は見送らせていただいた。現在個人情報関係から読書履歴は残らないようにしているが、今年度、自分はこれだけの本を読んだという記録を残し、モチベーションを保つ意味から「読書通帳」というか「読書記録ノート」を子どもたち自ら作ってもらおうと企画している。

有澤委員長：「読書通帳」というのは銀行の預金通帳のようなものか。

佐野館長：実際の「読書通帳」は、システムと繋がっているATMのような機械に通帳を入れると自分が読んだ本が印字されるといったもので、数百万円かかる。ウチ

(図書館)はそこまでできない。こうした機会に皆さんの声も聞きながら(図書館の活性化に向けて)課題を整理していきたい。

● 平成26年度図書館事業実績(4月~2月)について

事務局：別紙資料2により概要説明

上原委員：P4、直江津図書館のおはなし会に出演「本の友の会」とあるが、例えば「おはなしとことこ」のような団体の名前か？

丸山主任：そうである。

有澤委員長：これは新しい会か？

丸山主任：5年位前になるか…。確か公民館の講座を終了された方々の会かと思う。

笠原館長：「本の友の会」は公民館(の講座)出身である。毎月第二木曜日に開催していただいている。資料4ページにある「きょうのおはなしなあに？」は定例のおはなし会とは別に開催していただいたので別掲載とした。

有澤委員長：「考える絵本」原画展の参加者1,604人はすごい。

笠原館長：こどもとしょしつの中に3か所ほど原画を展示したもので、入館者の動線の中に組み込んだため必ず目に入ることから、この間のこどもとしょしつの入館者数とイコールになる。会場を別にすればもっと少なくなっていたかも？

大越委員：資料4ページ、おはなし会等の中で、高田・直江津とも数多くのおはなし会を開催しているが、担当する会は全て違う会なのか？

栗本係長：各団体や図書館職員が担当する。

上原委員：中学高校生向けに直江津図書館の奥まったところに、全身全霊を込めて描いたイラストや本の感想が貼ってあるが、もっと目立つところに掲示した方がいいのでは？

笠原館長：中高生を中心としたティーンズコーナーで、人気のコーナーである。前々から“イチ押し”ということで描いてもらっているが、現在は(入口近くの)大人のコーナーの方にも一部貼り出している。また、これは利用者のお薦め本として貼り出しており、これを見て借りていかれる方も多い。

有澤委員長：本を読んだ後でこう思った、ああ思ったといった、一種の交流がある。

○ 平成27年度図書館関係予算の概要について

事務局：別紙資料3により概要説明

有澤委員長：再リースというのは？

佐野館長：システム機器のリースは基本的に5年間である。その後は故障のリスクが高まるため、そっくり入れ替えるのが一般的なのだが、車も5年償却だが5年で買い替える人はあまりいない。今の技術であれば致命的なリスクにはならないと考え、2年後の29年はシステムを動かす仕組みそのものの見直しの時期ともなるので、機器の交換は少し先送りして、代わりに修繕費を計上して万一の時にメーカーからバックアップしてもらえる費用として予算要求した。

有澤委員長：節約しているということか？

佐野館長：少し我慢して使っていくということ。

○ 事務事業総点検の評価結果について

事務局：別紙資料4により概要説明

有澤委員長：文化はスリム化しやすいが、過度にやってしまうと人間の活力や品性にも影響する難しい面がある。

上原委員：今まで出ていた話かもしれないが、分室の廃止と聞いて衝撃を受けている。

例えば、板倉分室でいうと日当たりのよい絨毯のコーナーがあって、かなりの利用者がある。去年から職員が居なくなり、本を借りる際は自分で記入するようになったのだが、今のスペースはそのまま残るのか？

佐野館長：廃止というとゼロになる印象が強いが、今あるものの活用は今後も続けていく。ただ端的に言うと、高田図書館のランチから外すことによって図書購入予算が無くなるので、分室独自に本を買うことができなくなる。分室と分館、高田・直江津図書館の新刊の利用については極めてアンバランスである。例えば、新刊書を浦川原へ行けばすぐに借りられるが、高田・直江津では（貸出しの順番が）100番目ということも有り得る。従って、新刊書については上越市図書館システムで予約をしてもらい皆同じ列に並んでいただくといったような仕組みができないかということもあり、合併後上越市でのサービスの平準化・統一化を図れないか議論が必要である。施設によっては千単位の蔵書がある訳だから、それは活用したい。しかし、公民館も人が減らされており、板倉方式でこのまま継続していくことも考えられる。

有澤委員長：「みんなの本棚」的になるのか？

佐野館長：その可能性も無いとは言えない。各区の考えもある。

有澤委員長：今までは高田、直江津（図書館）のツインタワーに分館・分室が放射線状になっていた。そうではなくなるのか？

佐野館長：分館は元々図書館だったもので、これは残す。そこで地域バランスを考えて東頸エリア、頸南エリア等のエリア毎でこれからを議論する。分室は基本的に廃止する方向で考えていく。

大越委員：分室は地元に戻すから、使い方は考えろということか？

佐野館長：今までと仕組みは違うが、自由に使っていただくということ。

大越委員：予算はどうなるのか？

大越委員：現在、分室に係る予算は図書購入費と休館日の人件費だけ。今後、図書購入費はなくなる。従って、高田・直江津（図書館）、及び分館の予算で購入する図書を、列に並んで等しく使っていただくというのが基本的考え方である。

上原委員：今後、分室の蔵書が増えることはないのか？

佐野館長：ない。

有澤委員長：分室の分館化は？

佐野館長：例えば規模の大きい柿崎では、「分館より利用者が多いのに」という声が出てくるのが予測されるので、これから議論していきたい。

丸山副委員長：録音図書の制度も失くしていくのか？

佐野館長：今まで協力いただいた皆さんとの関係も今後考えていく。

丸山副委員長：今まで録音し高田図書館に納めた録音図書をインターネットにアップする考えはないか？

佐野館長：それは考えていないが、分室・公民館との連携でインターネットで予約し、搬送する仕組みはこれからも残していきたい。

池田委員：オンラインデータベースで何を止めて何を継続するのか、具体的に教えて欲しい。

佐野館長：例えば、「新潟日報記事データベース」では日報の記事が全て収められていて、何年何月何日等のキーワード入力で検索できるというものを市が借り上げて利用者に提供していたのだが、利用者が限られておりコストパフォーマンスを考えると如何なものかという問題意識から止めることにした。

池田委員：有料で使えるのか？

佐野館長：基本的に図書館での有料サービスは法律で禁じている。資料提供は図書館の使命であり、その経費は負担させてはならないとされている。

井上委員：牧区の話だが、失われたら二度と出ない大事な資料もある。合併による広域的な人事で、これらがちゃんと保護され伝えていかれるのか？

佐野館長：中央図書館として、高田図書館が管理し大事な資料の保護を心掛けていきたい。

井上委員：牧区などの場合、人が行って心が休まる、人を感じられるといったことも必要である。そうした配慮を図書館の方からも要請してもらいたい。

佐野館長：どんな形で今ある資料を維持し有効活用していくかについては、たとえ分室の位置付けを失くすとしても、検討していく。

有澤委員長：区単位でやっていかないといけない。相当難しい話になるだろう。

○ その他

(市人事異動について)

事務局：報告

4 問合せ先

教育委員会高田図書館 TEL：025-523-2603

E-mail：t-toshokan@city.joetsu.lg.jp

別添の会議資料も併せて参照ください。